

## 宗教学の「客観性・中立性」神話

本誌においてこれまで広く現代ジェンダー論の諸様相を紹介し、折に触れ宗教に言及することもあったが、新連載においては特に宗教に焦点を絞ったジェンダー論（宗教とジェンダー研究）の展開を体系的に試みたい。

ジェンダーとは、性別、性自認（ジェンダー・アイデンティティ）、性差（ジェンダー差）、性役割（ジェンダー役割）など多岐にわたる意味を持つ言葉であるが、ここでは一般に社会や文化が作り上げてきた男らしさや女らしさといった規範、男役割や女役割ととらえておこう。宗教も社会や文化の一部であるから、その教義や儀礼などを通して必然的にこれらのジェンダー形成に深い関わりがあることになる。

宗教をジェンダーの視点で捉え返してみることは、単にこの視点から宗教を批判的に評価するばかりではなく、宗教の可能性を開くことにもつながると思われる。だが学問の現状を見れば、宗教学とジェンダー研究との関係は、アーシュラ・キングのいう「ダブル・ブラインドネス」状態にあることがしばしば指摘されている<sup>(1)</sup>。ジェンダー研究からすれば、残念なことに宗教は女性を抑圧し従属させる負のイメージが先行し、宗教のもつ解放的で改革的なプラスの側面が見えづらいものとなっている。しかし負の側面があるとするならば、少なくともそれらに分析的に切り込み、変革の実践への糸口を提示することは、平等や解放を目指すジェンダー研究にとって本来的に意義があるはずである。

他方で宗教学のほうは、哲学・思想の領域と並んでジェンダーの視点の導入が遅れがちな分野である。宗教学の「客観性・中立性」神話のもとに、ジェンダーの視点からの研究は、多分に感情的で政治的な偏ったものとして退けられたり、あるいは正統的な宗教学に後から加えられる二次的な問題と捉えられ、非本質的で狭いものとして片づけられてしまう傾向にあるという。しかし宗教学の「客観性・中立性」とは果たして実際その通りであろうか、そしてジェンダーの視点とは非本質的で偏狭なものであろうか。

宗教学に限ったことではないが、そもそも諸学問の「客観性・中立性」神話にフェミニズムの見地から異議申し立てを行い、その再構築をめざす試みが女性学（Women's Studies）であり、そこを出発点とするジェンダー研究である。ジェンダー中立的に一眼みえる学問の「客観性」は、実は「女性たちの経験」を構造的に排除してきた側面があると言えよう。

宗教の分野においても女性宗教学者たちによって、そのような神話に対する批判的超克が行われ始めている。たとえば「ホモ・レリオス（宗教的な人間）」概念に依拠するミルチャ・エリアーデの宗教学にもジェンダー・バイアスが指摘されている。実際に、エリアーデが編集した『宗教百科事典 *Encyclopedia of Religion*』に欠如していたジェンダーの視点を補うべく、エリアーデの死から18年後の同改訂第2版には「ジェンダーと宗教」の項目21編が追加されたのである<sup>(2)</sup>。また女性学ならびにジェンダー研究は、人間の解放や平等を最終的に

めざすがゆえに、宗教の掲げる目標と本来合い通じるところが多く、偏狭であるどころかむしろ宗教の核心を突く方法であり、宗教に対する本質的な問いかけとも言えるのではなかろうか。

## 女性の視点

ところで、「宗教とジェンダー」研究と言いながらも、連載のタイトルが「現代宗教と女性」とあるのは不思議に思われるかもしれない。女性の視点とジェンダーの視点とは厳密に言えば実は同じではない。ジェンダーの視点は、男らしさ（男性性）の形成プロセスについての批判的考察をも含むものでなければならない。一方、女性たちはいまだに社会の様々なところで周縁的な位置におかれ、その視点（あるいは声）が圧倒的に少ないものとなっている現状がある。そうした女性たちに焦点をあてるため、ここではタイトルにあえて「女性」を使用してみたい。その意味で、先に述べた女性学（Women's Studies）の意図を重視した試みとなっている。

女性学の主眼は、女性を対象・客体とみる従来の男性研究者による女性研究とは一線を画し、女性が研究主体となることにあった。井上輝子の言葉を用いれば、女性学とは「女性の、女性による、女性のための学問」である<sup>(3)</sup>。しかしこのような女性の視点の強調によって、「宗教とジェンダー」研究から男性が排除されるわけではもちろんない。むしろ逆にそれは男性をも巻き込んだものでなければならないであろう。さらに「女性」を強調するにあたっては、同じ「女性」ということで女性をすべて本質主義的に一括りにしてしまうことの危険性にも十分な注意を払う必要がある。「女性」であっても、階級・階層、人種・民族・国籍、教育、障がいの有無などの「違い（差異）」が存在し、一枚岩的に語ることはできないからである（それはちょうど環境倫理学で長らく使用され、今では批判を受けている「エコ VS 人間」図式における「人間」が、一括りにできないのと事情はよく似ている）。

また「宗教とジェンダー」研究の視座は、ジェンダーのみならず、性的指向（sexual orientation）といったセクシュアリティ（性にかかわる欲望と観念の集合）にも向けられている。ジェンダーでは女性の視点により力点が置かれるのと同様に、性的指向の場合でも、異性愛に比べて周縁的な状態にある同性愛の方に考察の焦点を置くべきではないかと思う。

## [注]

- (1) King, Ursula and Beattie, Tina (eds.) *Gender, Religion & Diversity: Cross-Cultural Perspectives*, London: Continuum, 2004. アーシュラ・キング「(講演録) ジェンダーと宗教研究」『天理大学おやさと研究所年報』第11号、2005年など。
- (2) 宗教学の「客観性・中立性」神話、およびエリアーデのジェンダー・バイアスについては、田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』（世界思想社、2007年）を参照。
- (3) 井上輝子『女性学とその周辺』勁草書房、1980年。